対策徹底も感染「歯がゆい」

豚熱が発生した養豚場を見回る作業員ら＝津市で

津の養豚場で豚熱

県内最大規模 殺処分へ

津市内の養豚場で十四日、家畜伝染病の豚熱（CSF）への感染が確認され、飼育されている豚約一万頭の全頭殺処分が始まった。養豚場での豚熱は昨年末の伊賀市に続き県内三例目で、殺処分は最大規模となる。県や業界は予防策を強化していただけに、関係者の間に悔しさと不安が交錯する。

（松本貴明、須江政仁、斎藤雄介）

国の検査機関による陽性確定に先立つ同日昼。津市内の養豚場に、白い防護服姿の県職員らが集まっていた。人の背丈ほどある看板に、「立入禁止」の赤い文字。奥へと続く通路は、消毒剤がまかれたとみられ、白く覆われていた。

「皆が懸命に感染対策をしてきただけに、残念としか言いようがない」。県養豚協会の大西喬之（たかゆき）会長（三六）が悔しさをにじませる。

一昨年の県内養豚場での初確認以来、養豚農家は対策を徹底してきたといい、「動物が入れないよう柵を設けるのは当然で、手が荒れるほど消毒してきた」。全頭殺処分には「ワクチン接種済みの元気な豚の処分は、生産者の努力を無にすることで疑問でしかない。このままでは県内の食肉産業が衰退してしまう」と危惧する。

津市内の養豚場では三月二十六日から豚が相次いで死んでおり、四月十三日朝には八頭が死んだと県へ報告があった。うち四頭が県の検査で陽性に。いずれも生後四十～七十日の子豚でワクチン接種前だった。

県によると、子豚は母豚から抗体を受け継ぎ、一定期間過ぎなければワクチンの効果がない。昨年末は伊賀市内の養豚場でも、接種前の子豚が感染。鈴木英敬知事は会見で「厳密に対策をしていたが防げず、歯がゆい」と述べた。

県内では一昨年から、野生イノシシの豚熱感染確認エリアが北勢地域から徐々に南下。四月に紀北町で初めて見つかり、十四市町に広がった。今回の養豚場の周囲十キロ圏内でも昨年八月以降、計三十一頭が確認されており、県は野生イノシシから小動物を介しての感染とみている。

県は野生イノシシの捕獲頭数を増やし、検査数は三千四百件を超えた。養豚場の防疫強化への補助金も打ち出しているが、感染は再び起きた。十四日夜、約一万頭の殺処分を決めた対策本部会議で、鈴木知事は「他の養豚場にも防疫措置の強化と早期通報の徹底をあらためて周知してほしい」と指示した。

令和3年4月15日　中日新聞